

## 指導者（保護者）として大切にしたいこと（その19）

～「バスケットの楽しさを伝えたい ーある青年の志ー」～

2020年5月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

スーパーバイザー 大庭浩資

広島地区ミニバスケットボール連盟の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

前回まで、6回シリーズで「ミニバスケットボールの今昔」と題したコラムをお届けしました。すでに、何人かの教え子や指導者から、「懐かしかった」「面白かった」という感想をいただき、少しホッとしているところです。

そして今回のコラムでは、その今昔以上に、ぜひとも皆さんの胸に留めておいてほしい人を紹介します。すこし長い内容になりましたが、どうかどうか最後までお読みください。

### あるバスケットマンに捧げるレクイエム

青年にはささやかな夢があった

“広島の子ども達に素晴らしいプレイを観せたい”

“バスケットボールを、もっと広く愛されるスポーツにしたい”

バスケットに魅せられ 自らを厳しい環境へ

ハイレベルなプレイへと駆り立て そして・・・

あまりにも短い人生を 笑顔で駆け抜けた青年

コートに響くプレイヤーたちの靴の音が

会場の熱気が 天国にいる君のところまで届くだろうか

君の描いた物語は 今 残された者たちの手で

第一幕を開けたところだ

今から28年前、だれよりもバスケットボールを愛する青年がいました。

名前は西俊明（にし としあき）君。

彼は、「広島の地にバスケットボールを広めたい、広島の子供たちにバスケットボールで夢を与えたい」という志を抱きながら、21歳4か月という若さでこの世を去りました。

私が俊明君と初めて出会ったのは、新任教諭で赴任した千田小学校です。ただ3年生を担当していたため、当時5年生だった俊明君のことはほとんど覚えていません。弟の隆明君を担当していたので、そのお兄ちゃんという程度でした。また当時のバスケットのプレ

イもほとんど見たことがありませんでした。

俊明君のプレイをじっくり見たのは、私が瀬川照幸先生（U12部会顧問）に誘っていただき、5年生女子チームを指導するようになってからです。

国泰寺中学に進学した俊明君は、中学校のクラブ活動が終わったら、学校の帰りに千田小学校の体育館に寄ることが日課となっていました。

ある日のことです。いつもは瀬川先生が指導される男子チームの方へ行き、一緒に練習する俊明君が、その日は女子の方に来ました。それは何を指導していいか分からず困っている私を見かねたのです。俊明君は「先生、ちょっといいですか」と言いながら、いろいろな技や動きのポイントを教えてくださいました。「先生、これでいいですよ」とか「先生はこういう理由で言ってるんだよ」と言いながら、あたかも私が指導しているように、私を立てながら、一つ一つ部員に話をしてくれたのです。その時、私は自分の指導力の無さを恥ずかしく思うと同時に、俊明君に対して「なんてすばらしい好青年だ」と思ったのを今でもはっきりと覚えています。

女子へのアドバイスを終え、男子チームの方に移動した俊明君は、中学1年生とは思えない高度なプレイで男子の練習相手をしていました。初めて見た俊明君の華麗なプレイとすばらしい人柄。私はすぐに俊明君のファンになりました。

その後、彼が国泰寺中学の時に出場した中国大会や、北陸高校で出場した春の選抜大会など、何度も足を運んで試合を見るほどの追っかけになってしまいました。（笑い）

また俊明君のお父様やお母様も、それはそれはすばらし方でした。バスケットボールの時も、日頃の学校生活おいても、若気の至りとはいいながら、児童に対して無茶なこと言ったり、わがままなことを言ったりしていた私を、いつも温かいまなざしで見守ってくださいました。そのご恩は、一言で表すことはできません。

俊明君については、私より瀬川先生の方がはるかによくご存じです。

以下に、俊明君の3年祭で作成された「驚飛（シュート）」という記念誌の中にある瀬川先生の寄稿からの抜粋とお母様のお手紙の一部を紹介します。

誰よりも俊明君の良き理解者であった瀬川先生のお気持ち、また母親が我が子を思う気持ちが伝わるものです。まさに「指導者として、保護者として大切にしたいこと」です。

#### ジャンプシュート

瀬川 照幸

(前略)

俊明君が5年生になると、1年先輩の人数が少ないこともあり、彼ら5年生は、6年生の大会に選手として出るようになりました。この頃から俊明君も、だんだん上達していったように思います。利き腕のドリブルは上手なのですが、反対の腕のドリブルはできないという子が、当時の広島の小中学生ではほとんどでしたが、俊明君は、両

方の手で同じくらい上手にこなせる数少ない子供でした。

その年の全国大会予選では、森下君というすごい選手のいた原南小学校に1点差で負けてしまい、優勝は逃しましたが、全国大会には、原南小学校と千田小学校の連合チームで出ることになりました。俊明君は、5年生ではありましたが、ここで初めて全国というレベルの高い大会を経験することになりました。

(中略)

いよいよ俊明君も6年生になりました。相変わらず明るく元気で、クラスの人気者でした。

ミニバスケットボールクラブでは、当然彼はキャプテンで、多くの部員を引っ張ってってくれました。2年下には、俊明君が明生兄ちゃんを慕ってバスケットボールを始めたように、隆明君が俊明兄ちゃんを慕って入部していました。

6年生になってからの大会は、優勝か準優勝のどちらかでした。決勝はいつも東浄小学校とでした。全国大会予選では、2点差の惜敗でした。

全国大会には出場できませんでしたが、下関で行われた中国大会では、見事に優勝しました。この大会での彼の技能は、どの出場選手よりも頭一つ抜け出ていました。

(中略)

スポーツの技能はもちろんですが、人間的にも彼はすばらしい男でした。

小学校を卒業してからも俊明君は、夏・冬には必ず便りをくれましたし、アメリカに行っても、絵葉書をくれました。高校に行ってから、友達を連れて帰った時には、小学校にも顔を見せに寄ってくれ、「ぼくが初めてバスケットボールを教えてもらった、瀬川先生」と、私と友達を引き合わせてくれました。本当にさわやかで礼儀をわきまえた好青年に育ってくれました。

ここまで素直に育てられたご両親のすばらしさに、私は常に感心していました。

そのことを思うにつけ、あまりにも早すぎた俊明君の死を前にされた時、ご両親の悲しみはどんなだったろうと思わずにはいられません。

(後略)

※ 高校卒業直前、浮かれた気分になっていた俊明君ににあてられたもの

卒業までは (母からの手紙)

俊明君へ

元気ですか。せっかくの帰広中には忙しい思いばかりさせて、迎えもしてあげられなくてごめんなさいね。一度だってゆっくりと手料理がしてあげられなくて・・・すまないと思っています。でも俊君は、この西家で育ち、父母の働きで今日まで育てられ、これからも育てゆくのだということは解ってくれていると思います。

高校入学の時、約束してくれた学業と日本一の目標を達成してくれましたね。学業

については、あの内申書をお母さんの宝として、誇らしく卒業式に行けることをとても喜んでいますが。ご褒美は何がよいか、聞かないままでしたね。約束です。何がよいか言ってください。

(中略)

俊君、アメリカに行くには、本当に強い信念がいります。どんな誘惑があるかもしれませんが、自分が安易な方を選んだり、甘い水の方へ流れていったりしては、信念を貫くことはできません。まずは学生らしく、高校生らしい最後のフィニッシュを飾りトータルに1日も早く合格し、9月に無事入学できること。

そして、4年か5年かかっても良いけれど卒業する。このことは夢のような目標ですが、俊君が自分で企てた目標です。熱い思いを持ち続けて、道を外さないようにしてください。

卒業して帰広した時は本当に全日空でパーティーをしましょう。結婚披露宴よりも盛大にね。お母さんの夢が、また増えました。

卒業式までは、津田先生の監督下です。先生に心配をかけぬよう、奥さんに嫌な思いをさせないよう、福井生活最後のフィニッシュを楽しく過ごしてください。

寝食を共にした友人、後輩達、3年間本当に力になってくださった周りの方々に、感謝の気持ちを忘れてはいけません。「ありがとう」「すみません」「どうぞ」、この言葉と心こそ、人間にしかできない万国共通の素晴らしい言葉です。

(後略)

平成元年2月28日 母より

以下に、俊明君の略歴を紹介しておきます。

#### 西俊明君の略歴

1970年(昭和45年)	12月7日	広島市にて出生
1981年(昭和56年)	5年時、	全国ミニバス大会出場(千田小ミニバス)
1982年(昭和57年)	6年時、	中国ミニバス大会出場・優勝(千田小ミニバス)
1985年(昭和60年)	中学バスケットボール	中国大会出場・第3位(国泰寺中)
1986年(昭和61年)		北陸高校普通科入学
1987年(昭和62年)		全国高校選抜大会準優勝(優勝は能代工業)
1988年(昭和63年)		全国高校選抜大会準優勝(優勝は能代工業)
1988年(昭和63年)		インターハイ優勝(準優勝は能代工業)
1988年(昭和63年)		全国高校選抜大会準優勝(優勝は能代工業)
1989年(平成元年)	1月	ノースカロライナ大学シャーロット校入学
1989年(平成元年)	7月	帰広、体調不良で入院
1992年(平成4年)	4月	死去(享年21歳4か月)

次は俊明君が、いよいよ自分の夢に向かってスタートを切る時の様子を載せた新聞記事です。地元の新聞社が、他の活躍した有名選手ではなく、俊明君のことを取り上げているのですね。記事の中には「広島に戻り・・・」とはっきり書かれています。

昭和63年（1988年）12月15日 福井新聞

### 『日本一の名コーチに』

今年度のインターハイで悲願の日本一を果たした北陸高校男子バスケットボール部のレギュラー、西俊明選手＝普通課3年＝は、今度はその目標を日本一のコーチになることに置き換え、本場、アメリカ留学を決行することにした。

実業団や大学からの誘いを断っての武者修業先は、これまで何度となく全米大学一に輝いているノースカロライナ州立大シャーロット校。

西選手は広島県出身で、小学時代からバスケットボールひと筋に歩んでいる。日本一を目指して北陸高校にやってきた。175cmとバスケットボール選手としては小柄ながら、豊かなバネを生かして2年生でレギュラー入り。昨年春の選抜大会準決勝の興南（沖縄）戦では、残り1秒で左サイドから逆転のゴールを決めるなど、勝負強さは抜群で、バスケットには天性のものを光らせた。

当然ながら、西選手にも実業団や大学のスカウトからの誘いは数多くあった。

「僕の体で通用するのは高校まで。でもバスケットから離れることはできない。それならば立派な指導者になりたい」と、同僚らが大学選手を目指す中であって、きっぱりと方向転換。

大阪市内にある国際留学生センターを介してシャーロット校の受け入れの了承も得ている。来年3月の卒業後、まずはすでに推薦入学が決まっているノースアイオア大に入って、ここで英語の集中講座を2か月ほど受ける。9月の新学期と同時に、シャーロット校に転校する予定になっている。

コーチ、マネージャーといえ、国内では日の当たらない役目。しかし米国ではその地位が逆転する。バスケットをよく理解していることはもちろん、選手の健康管理などすべての責任がかかる重要なポスト。

西選手は「ともかくも本場のバスケットのなかに身を投げ出して、多くを吸収してきたい。留学を終えて広島に戻り、高校生のバスケットを指導し、北陸高校と対戦することが当面の宿題です」と目を輝かせた。

西選手を3年間、公私ともに世話し続けた同校バスケット部の津田洋道監督は「西のような考えを持った生徒は初めてだ。しっかりしているし部員をまとめる力もある。きっと素晴らしい指導者に育つことだろう」と、太鼓判を押している。

次は、俊明君が繋ぐ、広島のカラケットボールについてです。

俊明君が亡くなった後、彼の夢（「広島にカラケットボールを」）を実現しようという、様々な活動が行われています。その中心になられているのは、俊明君の兄、明生さん（広島ドラゴンフライズの初代GM）です。

これからいくつかの活動を、当時の新聞記事や資料をもとに紹介します。

記事に出てくる選手の名前を見ると、俊明君の人望の厚さが伺えますが、特に佐古賢一さんは、2013年創立した、広島ドラゴンフライズの初代ヘッドコーチです。

これこそまさに、俊明君が招いた縁ではないでしょうか。

まずは、俊明君がルールを作ったスーパー・カラケットの記事です。

俊明君は闘病中も、カラケットボールの事を忘れず、何とか広島にカラケットボールを広げたいと思い、地道に活動を続けていたのですね。

この活動をきっかけに、広島でも3ON3が盛んになり、「JACUP 3ON3ビッグトーナメント」開催へと繋がっていきます。

1991年（平成3年）1月4日（金曜日） 中国新聞

### 『スーパー・バスケで国際交流を』

国際交流へシュート！ 広島大の留学生が、米国で人気上昇中のスポーツをもとに新タイプのゲームを考案。「スーパー・カラケットボール」と名付け、2月24日に広島市中区の国泰寺中学校で、大会を開く。

考案したのは、広島大工学部大学院で学ぶ、インドネシアのドニー・アキルディンさん。日頃接触の少ない留学生と広島の学生がスポーツを通して交流できないかと考え、少人数のストリート・バスケに注目した。

ストリート・バスケには統一ルールがないため、新ルールは米国の大学でコーチの勉強をした西俊明さん（20）＝中区千田町＝が作った。

（以下省略）

続いて、ひろしま国際親善カラケットボール大会の記事です。

この記事は、私もすっかり忘れていたものですが、改めて読んでみてびっくりしました。と言うのも、記事の中にある、広島の小学生と岩国米軍基地内にある小学校のチームとの親善試合で、私は広島チームの監督（当時、庚午小ミニバスのコーチ）をしているのです。そしてキャプテンは、U12部会理事の田中孝明先生（当時、庚午小ミニバス）です。これも俊明君が繋いでくれた縁でしょう。

1992年（平成4年）7月14日（金曜日） 中国新聞

『亡き弟の夢 実現させたい ～交流促進願って国際バスケ開催～』

元実業団のバスケットボールプレイヤー、西明生さん（30）＝中区千田町＝が、18日、広島市中区スポーツセンターで、全日本男子のメンバーや岩国米軍基地のチームを招待し、「ひろしま国際親善バスケットボール大会」を開く。

西さんは、バスケットボールに青春を燃やし、4月のがんで亡くなった弟の意志を継いで、大会を計画。「多くの人に見てほしい」と呼びかけている。

大会には、全日本の塩谷清文（日大）や佐古賢一（中央大）ら12人のトップレベル選手が参加。岩国米軍基地のチームと試合をしたり、地元の中学生に指導をする。また広島の小学生と岩国米軍基地内にある小学校のチームとの親善試合もある。

西さんの弟、俊明さんは、小学生からミニバスケットボールを始め、国泰寺中から北陸高校（福井）に進学。175cmのガードとして活躍し、神戸インターハイでは全国制覇した。卒業後は渡米。現地の大学に合格したが、入学前に帰国した時、病魔に侵されていることが分かった。日本での2年間の闘病後、21歳で亡くなった。

俊明さんは闘病中も、米国生活の経験を生かして、地元の留学生や岩国基地のプレイヤーと一緒に、2人1組のストリートバスケットの大会を開くなど、バスケットを通じての国際交流に情熱を燃やしていた。

「弟は、子供たちにバスケットのすばらしさを教えたい、といつも話していた」と西さん。「俊明の夢を実現させたい」という西さんの気持ちに、北陸高校で俊明さんのチームメートだった塩谷さん、佐古さんらが共鳴。岩国基地のチームにも呼びかけ、約2週間前から準備に取り組んだ。

西さんは「弟が、私にきっかけづくりをしてくれたと思う。広島アジア大会、広島国体を控え、一人でも多くのジュニアにレベルの高いプレイをみせることができれば」と期待している。

次は、「広島アジア大会」の記事です。

今から26年前、広島市を中心に広島アジア大会が行われました。この大会には、ミニバスケットボール連盟からもほぼ全員の指導者が役員として参加しましたから、覚えておられる人も多いと思います。

私は式典委員長でしたが、開会式や閉会式で、外国人の選手がなかなか思うように動いてくれず、とても苦勞したことが思い出されます。

大会では、佐古賢一選手が大活躍し、12年ぶりに銅メダルを獲得しました。

1994年（平成6年）10月2日（日曜日） 中国新聞

『亡き君のふるさとが舞台だ ～楽しくバスケ 志継ぐ～』

「広島は彼の出身地。見守ってくれる気がして・・・」。広島アジア大会の男子バスケットボールに出場する佐古賢一選手（24）＝いすゞ自動車＝は、北陸高校（福井）の元チームメイトで、がんで2年前に亡くなった西俊明さん＝当時（21）、広島市出身＝への思いを胸に4日、初戦（台湾戦）に臨む。

佐古と西さんは北陸高校で「3年間クラスメイト、ポジションも同じガード。一番気が合った」親友だった。2人は、昭和63年の神戸インターハイ優勝に大きく貢献した。

高校卒業後、佐古は中央大学へ、西さんは渡米し、現地の大学入学を目指した。「将来は優秀な指導者になり、大人から子供まで、バスケットの楽しさを伝えたい、と常々口にしていた」と振り返る。

平成2年、西さんはノースカロライナ大学に合格した。だが入学前に帰国した時、病魔に侵されていたことが判明、2年間の闘病生活後、この世を去った。親友の訃報（ふほう）に、佐古は広島に駆けつけた。「彼の死が信じられず、早く起きろよ、と叫びたかったほど落胆した」と当時を思い起こす。

西さんの「バスケットの楽しさを伝えたい」という遺志を継ぎ、兄の明生さん＝（32）、中区千田町＝は3年前から毎年、市民参加のバスケットボール大会を実施。佐古も「何か力になりたくて」と過去2回参加した。

バスケットボール男子の鈴木秀太監督（48）の「アジアのどこに出しても恥ずかしくない選手」との言葉通り、日本を代表するガードに成長した佐古。「試合前は彼の墓参りに行くつもり」と話す。

「彼のバスケットをもっと広めたい、という希望を、今大会で少しでも実現してあげたい。そのためにもメダルを獲得し、多くの人に関心を持ってもらえるように頑張りたい」という決意を新たにしている。

1994年（平成6年）10月5日（水曜日） 福井新聞

『亡き親友が力くれた ～日本、台湾に逆転勝ち～』

「広島は親友の古里。勝てて良かった」  
男子バスケットボール予選Aグループ初戦。ガードで活躍した北陸高校出身の佐古



賢一（いすゞ自動車）は、強敵台湾との接戦を終えてホットした様子。2年前に亡くなった親友、西俊明さんの故郷での勝利に笑顔が弾けた。

佐古は昭和63年、同校が神戸インターハイで全国制覇したときの選手。広島市出身の西さんも同じチームで活躍した。3年間、クラスも一緒、ポジションも同じガードと言うことで一番仲が良かった。

高校卒業後、佐古は中央大学に進学。西さんは米国ノースカロライナ大に合格したが、入学前のがんと判明。2年間の闘病後、この世を去った。訃報を知らされた時はショックで立ち直れないほどだった。

佐古はこの日、「初戦ということで緊張し、ファウルが多かった」いうが、要所要所に出場。最後は日本が同点に追いついた残り30秒でコートへ。台湾のファウルを誘い逆転となるフリースローを導いた。日本にとっては、まるで絵に描いたような逆転劇だった。

「試合前、西の家を訪ね、仏前にあいつの好物のあんパンと牛乳を供えてきたんです。西のおかげで勝てたのかもしれない」。

亡き親友が与えてくれたパワーは「次のサウジ戦（8日）も負けない」との熱い闘志へ繋がっていた。

さて最後に、皆さんは、中学校で毎年9月に行われる、

「TOSHI AKI CUP 広島市中学生ルーキーズ大会」をご存じですか？

TOSHI AKI CUP = としあき カップ

もうお分かりですね。

これは俊明君の夢を、そして志を実現するための一つの大会です。昨年度は19回目の大会でした。本当にすごいことですね。

「バスケットの楽しさを多くの人に広めたい、バスケットを愛する仲間をたくさん作りたい」と、口癖のように言っていた俊明君。

私たち指導者や役員、保護者は、彼の意志を継いで、今後のバスケットボール界をもっともっと盛り上げていく責任があるように思えてなりません。

俊明君、遠い天国から、我々の活動を応援してください。

<追伸>

資料の整理をしていて、掲載記事以外にも、これも載せたいあれも載せたいというものがたくさんありました。それだけ俊明君がバスケットボールを愛し、俊明君もまた多くの人に愛されていたことを改めて感じました。